

# 恐怖の館

大島 行雲

招待状を譲られて、男はパーティーに行った。

黒い洋館。赤い文字で書かれた表札は、男には読めない漢字だ。夜空には半月が、まるで男を睨みつける様に輝いている。黒い壁に開いた覗き窓を通して、黄色い光が男を凝視していた。

大広間には溢れんばかりの人々が集まって、無数の会話が飛び交って意味のない音の波となつて男の耳に流れ込んでくる。人影ができるのさえも防いでしまいそうなほど、明るい照明が天井から降り注ぐ下、顔も名前も知らない老若男女が、様々な酒を手にして何か話をしている。

男に会話は無い。

誰も男を気にも止めない。

「すみません、はじめまして……」

男が会話の中に入ろうとすると、誰もがにこやかに微笑んで会釈をし、簡単な自己紹介をする。彼らの会話は続く。

男に会話は無い。

誰も男の言葉を気にも止めない。

目の前には数え切れないほどの人々が、聞き取れないほどの話題に盛り上がっているのに、誰も男を知ろうとはしない。

ばつが悪くなった男は壁際に置かれた椅子に腰を下ろし、ウ

イスキーを舐めながら、見知らぬ群衆の言動を見つめる。高い背に体格の良い青年が照れた風に髪を掻いて笑っている。小柄で未だ汚れを知らぬが如き美しい肌の少女がくしゃみをした。男に自信はない。

視線を落とすと、床を蜘蛛が這っている。種類は分からないが、大きくも小さくもない、体の割に脚が細長い蜘蛛は、この館の白い大理石の床には場違いだった。

「こんなとこいたら、誰かに踏まれちゃうぞ」  
胸の中で男は蜘蛛に話しかける。

二人の傍を青春の塊の様な若者が意気揚々と通り過ぎた。薄汚れたローファアの踵で蜘蛛を踏み潰して。

男は眉間に小さく皺を寄せ、遠ざかる若者の背中を見つめる。立ち上がりかけ、口を開きかけ、そして、やめた。

口は開かない。心臓の下で熱した言葉が行き場を失って生き詰まる。飲み込む。全身に何かが染み渡っていく。

壁に置かれた花に目を移す。萎れたピンク色の花を見る。ただ、男は花を見つめた。

徐に瞼が熱くなり、歯を噛み締める。

数滴の涙が荒れた肌を弱々しく伝い落ちる。

誰も男を気にも止めない。